



2022年3月24日 森本紀行はこう見る

## 日本的なものを徹底した先の真のグローバル

グローバル経済とか、グローバル人材の育成だとか、グローバルという言葉が頻繁に使われますが、グローバルとは何のことか、そこには、何か理念的なものはないのか。

グローバルは、球を意味するグローブの形容詞形で、球とは、いうまでもなく、地球です。さて、地球の表面に中心はありませんが、地球の表面を平面の地図に表せば、必ず中心が生まれますから、日本で売られている世界地図では、日本が中心となり、英国で売られている世界地図では、英国が中心になるわけです。日本が極東で、シリアが中東になるのは、英国の地図の上でのことであって、日本の地図では、アメリカ東海岸が極東で、英国は極西になるのです。

グローバルとインターナショナルの違いですか。

インターナショナルは、字義としては、国家と国家の関係ですが、実際には、一つの国家を中心にして、その国家と他の国家との関係を意味しているわけです。それに対して、グローバルは、字義通り、国家を超えた地球という次元にあるものです。

故に、理屈上、真のグローバルは、地球が一つの国家に統合されたときに成立します。そして、地球が一つの国家になれば、国家という概念自体が根本的に変質するはずですが、なぜなら、現状、国家は、他の国家との関係において、即ち、インターナショナルな地平において、成立しているからです。

世界は国民国家の成立によって生まれたのですね。

近代市民社会の成立は、国民国家の成立によって画されます。以来、今日に至るまで、同じ国家に属する人同士の関係、即ち国内的な関係と、異なる国家に属する人同士の関係、即ちインターナショナルな関係とは、本質的に異なるものとなりました。人類の歴史は、暴力による支配の歴史ですが、国民国家の成立は、少なくとも国内における理性の支配を実現し、暴力による支配を否定します。しかし、かえって、戦争という国家間の暴力の行使を正当化させてきたのです。

普遍理性の勝利を信じる理想主義の立場からいえば、グローバル化とは、歴史の進歩であり、人類の叡智の進展であり、理性の創造的な自己展開なのであって、最終的に、地球の上に、一つの世界市民社会を成立させ、理性の支配を実現し、暴力による支配を廃絶するはずです。いかに遠かろうとも、その日は必ずくるのです。

もはや、哲学ですね。

哲学ではなく、経済です。グローバルは、端的に人と人との関係です。日本企業がアメリカの顧客に商品売るというのは、インターナショナルな発想です。グローバルな発想では、単に一企業が一顧客に商品売るだけのことです。グローバル化とは、そうした発想の転換のことでなければなりません。

アメリカ国家の強大な軍事力を背景にして、アメリカ企業が多国籍展開できているのだとしたら、それはグローバルではありません。アメリカ企業は、純粹に事業の合理性のみに基づいて、多国籍企業としてではなく、ましてやアメリカ企業としてではなく、無国籍企業として、世界展開できてこそ、真のグローバルです。グローバル化とは、そうした力の支配から、理性の支配への転換でなければならないのです。

やはり、哲学ですね。

理念としては、グローバルは、社会哲学の地平にあります。しかし、そういうことは、逆に、いかに現実社会がグローバルでないかを物語ります。代表例がオリンピックです。本当は、真にグローバルなスポーツの祭典でなくてはいけないのに、実際には、競技の仕組みも、開催地の選定も、国家と国家の競争関係になっています。

オリンピック運営の背後にある哲学は、真にグローバルなものであるはずですが、現実の運営は、著しく錯綜したインターナショナルな政治的利害の対立です。むしろ、グローバル経済活動のほうが真にグローバルな協調と相互理解に支えられています。それは、おそらくは、経済活動のなかに、経済の合理性という普遍性が潜むからです。

理性は普遍的であり、没個性ですが、人は個性的ではないでしょうか。

グローバル化とは、何か一つのものに統合されることではありません。そもそも、理性以外には人間には共通するものはなく、全てが個性的なのです。グローバルは、理性による

支配であると同時に、多様な感性、心性、価値観、言語、食べ物、着るものなど全ての個性的なものの共存です。故に、グローバルと並んで、もう一つの重要概念が多様性、即ち英語のダイバーシティになるわけです。グローバルは、多様性と組み合わせあって、真に意味のあるものになるのです。

多様なものは、多様なものとして、相互に尊重しあい、相互に刺激しあい、相互に吸収しあい、相互に働きかけあうことで、新しいものを創造していくわけで、その過程が人類の進歩であり、世界市民文化の創造的革新であり、経済社会の成長なのです。

その多様性のなかで、日本的なものが輝くわけですか。

中国やインドやイタリアの食文化に刺激を受けて、日本でラーメンやカレーライスやナポリタンという国民食が創造されたように、浮世絵がフランス印象派に大きな影響を与えたように、伊万里がマイセンに影響を与えたように、日本は、世界から影響を受け、世界に影響を与えて、多くのものを創造してきました。

日本にしかないもの、日本の文化的伝統のなかから生まれてきたもの、日本固有のもの、日本の歴史的体験に根差すもの、日本の個性、日本人各人の個性、要は、徹底的に日本的なものをグローバルな文化創造の場に提供することによって、日本はグローバル文化の進歩に積極的な貢献ができるのです。

しかも、日本にこだわることは、日本に閉じ籠ることではないのですから、ありとあらゆる非日本的なものを日本的なものに融合させ、そこに、化学反応、いや、爆発を起してこそ、グローバルなわけです。正統な日本料理を海外に普及していこうという発想は、少しもグローバルではありません。日本料理の技法を全世界のありとあらゆる食材に適用し、日本固有の食材を世界のありとあらゆる調理方法に適用してこそ、グローバルなのです。そういう意味で、ラーメンの世界展開はすごいのです。

正統な英語を学ぶことは、少しもグローバルではないのですか。

英語を生得の言語とし、正統な英語を話す人々は、世界共通言語としての正統な英語の普及を望むかもしれませんが、英語以外の言語を生得の言語としている人は、正統な英語を身につけたいと願うかもしれませんが。しかし、正統な世界共通言語は、それができるとして、英語を基礎に置いたものかもしれませんが、多様な他言語から新しい表現や単語が取り込まれて、正統な英語とはかけ離れたもの、即ち破調の英語になるべきです。

日本でグローバル化がいわれるとき、必ず英語教育の問題になりますが、正しい英語を語学として習得することは目的ではないはずで、社会的行動として英語を使って意思を伝えることが目的ですから、英語教育政策の課題は、英語を教えることではなく、英語を使う機会を作り、ジャパングリッシュ、即ち日本的破調英語を輸出することになるはずで

世界的破調英語の創造に参画することがグローバルなのですね。

日本固有の価値は、英語に翻訳され得ない場合もあるし、敢えて英語に置き換えない場合もあるので、英語のなかに日本語が外来語として入り込むことになります。英語のワギューは和牛ですが、それは、日本にしかない特別な牛肉なのです。故に、そのまま、英語の単語になってしまったのです。

和牛は、日本の高度な品質にこだわったが故に、その故にこそ、グローバルな高級食材になったのです。しかし、他方で、牛肉が西洋の代表的な食材であったからこそ、グローバルになり得たわけで、単なる日本の固有性だけでは、グローバルな食材たり得なかったはずで

日本のマンガ文化を日本の立場から日本の外へ紹介しても、マンガ文化のグローバル文化への創造的成長は起き得ません。日本のマンガ文化と、日本の外のありとあらゆる現代芸術の領域とが相互に響きあい、創造的に働きかけあい、何か新しいものが生まれてこそ、日本のマンガ文化がグローバルな貢献をなし得るのです。